# コメント

伊藤 亜人
（東京大学・名誉教授）

伊藤と申します。今日はこのような、3人の発表全体について、しかも、南山大学の今後の人類学のあり方や人類学研究所のあり方まで含めて私がコメントするというのは大役で、一体どういう形でできるかと、随分前から悩みながら、ここに至りました。

おそらく、最初にお話をされたクネヒトさんと私はもう学生のときから友人であるということが、コメンテーターに選ばれた一つの理由だったと思います。もう一つは、ドイツ語圏における、いわゆるドイツ・オーストリア的な歴史民族学というか、エスノロジーの教育・研究が、我々の前世代において盛んにおこなわれてきましたが、私がその影響を受けた最後の世代であるということも理由かと思います。そういう数少ない人の中から私がコメンテーターに選ばれたのだろうと思います。

しかし、私が本日もっとも力を入れたいと思って新幹線の中でも考えてきたのは、やはり今日の日本において、人類学の使命というか、人類学研究所あるいは、その教育のあり方です。まさにこれは新しい、クネヒトさんの言葉を借りれば、逆のミッショナリー、人類学的なミッショナリーというものが求められているのではないかと思います。そういう意味では、大学教育・研究において、新たにその展望を探るということは、この大学だけでなく、日本全国で、あるいは学会を挙げて求められていることだと思います。そういうことを申し上げようと思います。

ドイツ・オーストリア的な民族学について、私の学生のときはまだドイツ語で授業をやる、ドイツ語のテキストを使った授業がいくつかありました。大林太良先生の授業もそうでした。そのときに読んだ本は、シベリアの少数民族、狩猟採集民の世界観に関するドイツ語の文献でした。それから宗教学の小口偉一先生の授業もそうでしたね。ただどういうわけか、本郷の文学部宗教学の教室で授業をしていました。小口先生は駒場のキャンパスまで来るのが煩わしくて、私たちに本郷まで来いというものですから、文学部の厳粛な雰囲気の教室で、やはりドイツ語のテキストを使った授業を受けた覚えがあります。

しかし、それ以後は、ついにドイツ語はどんどん錆びる一方でした。先ほどからドイツ・オーストリア的な学問のシュミットやコッパース、グレープナー、グジンデといった名前が出てきました。私自身は、大林先生の指導学生として大きな影響を受けましたし、その後もエスノロジーには誰よりも関心を持ち続けてきました。

今日は久しぶりに、そういう古い研究者の名前を聞いて、それから、フランクフルト学派のレオ・フロベニウスやイェンゼンなんていう名前も出てきましたが、やはり大林先生を通して、私も何となく魅かれた時代があったことを覚えております。

その時に受けた教育が、その後、自分の人類学の研究にどこまで生かされたのか、振り返ることがあります。時には、やはりこれには意味があったなとポジティブに考えています。例えば、

神言会の神父たちが、原始一神教という至高神の信仰について、世界布教の基礎となりうると考えていたことを、授業や概説書によって知ってはいましたが、自分でも民族誌のなかでそれに接したことがありました。東南アジアの、例えば、ホワイト（W.G.White）が東南アジア・アンダマン海の漂泊漁民・船上生活漁民について、Sea Gypsyとして報告した中でも、彼らの信仰世界における「創造主」や「神聖」という観念に多大な関心を払っていたと思います。また、ドローヌ神父らの旅行記やら当時の民族学の報告でも、雲南山地の少数民族について至高神に通じる観念に触れていたように記憶します。

そういうことがどこかに埋め込まれていたのか、その後、中国の世界観における「天」という概念の背後に、やはり大陸に広くそうした至高神的な観念があって、それが洗練化され体系化され、倫理性をもち、世界を統治する帝国の体制とも結び付いて、あのように体系化されたのかなと思っているうちに、今度は韓国研究をやるようになりました。韓国在来の概念では神のことを「ハナニム」や「ハヌニム」と言います。ハナもハヌも「大きな」「天上の」「唯一の」「偉大な」という意味を併せもつ概念で、漢語で表現すれば「天」となります。これをキリスト教の宣教師たちは、朝鮮におけるキリスト教布教の基本として、戦略的に用いてきたわけです。つまり、「ハヌニム」という言葉とキリスト教における「神」という概念を結びつけてきたのです。

朝鮮における神話をはじめ、現代の民間信仰の中でも、やはり「ハヌニム」というのは主体がはっきりしているようで、おぼろげですが、それでいて国歌の中でも謳われています。しかし、文献神話には「天帝」と漢字表記され、中華の「天」と区別がつきません。一方キリスト教の側では「God」という概念を結びつけたことになります。しかし、その混沌とした、綱引きのような中で、やはり東アジアの古いところにこうした至高神に通じる信仰があったのではないかと考えたりします。では、日本の民俗信仰の中に、これに対応するものがあるのだろうかということも考えてみますが、どうも、いつまでたっても、それが見えないというのが現実です。

このように、自分の思索においてアジア、日本を広く考える上で、シュミット以来の文化圏という構想などは、自分の思考にとって全く無駄であったとは思えません。

それから、つい最近も、韓国済州島の友人たちが写真集の出版を準備しているのですが、1969年に私が撮った写真を集めてみると、石の写真をたくさん撮っていました。石の名についてもいろいろたずねていました。丸い石、地面から飛び出した石など、あるいは石にまつわる話を聞いていいました。

なぜこんなに石の写真を撮ったのかと韓国から質問が来ましたが、それはその当時、「アロール島における石の利用」というオランダ人の民族学の論文を読んだからでした。それから、同様に独墺的な民族学の延長上で、当時日本でも関心を呼んだものに巨石文化に関する民

族学的研究がありました。巨石Megalithに関する関心がどこかに刻み込まれていたようで、それで私もしきりに石の写真を撮ったり、石にまつわる話に惹かれたようです。済州島は「済州三多」といって石が多いことで知られていましたが、私ほど石の写真を撮った人はなかったかもしれません。

そのように、自分にとって独墺流の民族学は、無駄でも過去の産物でもなく、大きな世界観や世界規模の歴史的パースペクティブは、やはり人類学の研究にとって必要だと思います。

クネヒトさんの話を聞いていて非常に感銘を受けた点は、何といっても、まさにミッショナリーの問題です。ミッショナリーという、キリスト教の宣教という世界規模の戦略の中心から派遣され、置かれた拠点。そして、そこに求められていたものと、そこに赴任してきた人たちが出会った経験。そして、そこで観察して気付いた、現地の人々の宗教心や信仰の世界というもの。その間のジレンマといいますか、コントラディクションとまでは言わなくても、ジレンマがどういうことになったのかという問題です。

南山大学は今なお、キリスト世界の中においても重要な位置づけをされた大学で、布教の歴史を背景に民族学の研究拠点となり、そこで民族学を通して、名称も変わり、人類学研究所ができ、学科ができてきた。この歴史を生かしながら、どのようにこの拠点をこれから発展させていくかということが課題となるかと思います。ですから、シュミット神父からエーデル師、クネヒトさんたちの葛藤やジレンマといいますか、感じ取った新たなパースペクティブを何らかの形で生かすべきだろうと思います。

「ミッショナリー」という言葉を逆手に使うなら、キリスト教世界の周辺部にあって、民俗文化に根ざした精神的な感性といいますか、必ずしも一神教のように体系化された世界観ではなくても、身の周りの物に込める思いや気持ちのような精神性。あるいは生活像を支える様式性ですね。様式を共有することの精神的な側面、あるいは、信仰や感性と結びついた儀礼、そういったものに着目する人類学的な宗教研究、宗教人類学的な研究に南山大学は力を入れてほしいと思います。

これが、歴史を生かした南山大学らしい一つの拠点であると思います。しかも日本発信の、シュミット師から始まりエーデル師、クネヒトさんを通して、3世代、4世代にわたる世界規模の経験をこの拠点においてどのように生かすかということを考えると、この大学における人類学の研究あるいは教育にとって重要なパースペクティブになるのではないかと思いました。

それから、後藤さんは、もともと考古学でありエスノロジーであり、神話学や宗教、信仰にも関心をもち、非常に幅が広くて、大林先生との関わりも深くて、私が以前から仲間意識をもって、ずっと尊敬してきた方なのですが、やはり後藤さんが中心となった考古学や物質文化、あ

るいは技術や歴史も、この研究所の、南山大学の大きな特色だろうと思います。その点は、現在もこの研究所では力を入れており、順調に発展しているように思われます。それは今後も何とか生かし続けてほしいと思います。現にこの研究所および学科において力を入れ、それが順調に発展しているように思われます。

人類学の使命や今後の展望については、もともと人類学に求められたものが何だったのかと考えれば、大航海時代以来の世界大的な交流の中で、あるいは、非常にグローバルな一体性を一方で追求する中で生じてきた、さまざまな他者に対する関心、また、マイノリティー、異文化に対する関心というものがありました。

そういった社会的な要請は、今も昔も全く変わっていないと思います。コンテクストが違うだけであって、近代化の名のもと、国家レベルの社会統合が強調される中で、宗教や思想、教育、経済システム、情報システム、あるいは軍事システムまで推進されてきました。しかし、社会のシステマシーを追及する中で、新たに周縁化された人々をめぐる社会問題も顕在化しています。経済システムにおいて非生産的とみなされる老齢者や非公式セクターとみなされる弱者など、新たなマイノリティーをめぐる問題は、日本だけでなく世界的な課題となって浮上していると思います。これを福祉の問題とすり替えられることも多いのですが、基本的に見てシステムがはらむマイノリティーであり、あるいは、社会統合にともなう負の遺産でもあるわけです。こういった問題に目を向けるのは、やはり人類学であります。

とはいっても、国家統合あるいは経済の合理性というものが強調される、あるいは効率がシステマティックに追求される体制の中で、あらゆる分野のエリートは皆、システムで世の中を捉えようとするわけです。その中で見逃され、あるいは軽視される人たちは、システムにおいて周縁に位置づけられます。こういう問題は、かつて人類学に期待された状況とはまた別の意味で、現在もなお、あるいは、ますます大きな問題として我々に突き付けられているように思います。南山大学においても、こういった問題にも少し目を向けるようなプロジェクトやセミナーをもたれると、広く学生たちの関心を集められるのではないかと思います。

要するに産業化や情報化、あるいはAI化というものが進む中で、例えば今、AI化の体制づくりの中で、日本の総務省が中心となって、情報学系の教授なんかも長になって、AI時代における人間の問題をどう扱うか、あるいは、倫理性をどのように確立するかという諮問委員会や研究会が設置されています。しかし、その概要が紹介されているのを見ると、二言目には「人間的」という言葉によって八つの項目が挙げられたりしていますが、そのどれをみても、リアリティーのある人間像に根ざした議論はないのです。これも、人類学に求められる大きな課題だと思っています。

言葉だけで「人間的」や「人間性」、「倫理性」うんぬんと言われますが、職場をはじめとして、我々が現地で観察・記述できるレベルで、よりリアルな人間の置かれた状況を取り上げるということは、今、非常に重要な課題だと思います。それはこの大学だけではなくて、日本の学会全体の問題でもあるのですが、なかなかこれに対して十分な対応が図られているとは思えません。

老齢化や過疎化の問題は、今やもう国民レベルの課題として、誰もが関心をもっています。あるいは、移住労働者をめぐる課題もまさに現在進行中で、これがどの方向に展開するか。展望もなかなか見えにくい問題をはらんでいると思います。人類学の中では、各地で目撃し、現実にそういう問題にコミットしている研究者も多いのですが、これを一つの新しいミッショナリーのような形で、明確な一つの、方向を見据えて発信をすべきではなかろうかと思います。

私が現地調査をおこなってきた韓国の農村では、もう50年近く観察しているのですが、農村に嫁いでくる外国人女性ばかりでなく、近年はベトナム人やスリランカ人など外国人労働者があらゆる分野に入ってきています。彼らは今では電話一本で、明日は何時からどんな作業だと言うと、パッと人が車で送られてきて、つい2、3年前まで地域の女性がこなしていた仕事をみんな、ウズベキスタン人やロシア人、あるいはベトナム人がこなしているのです。たった数年の間に起きたことです。漁村のほうに行くと、地元の若者、あるいは韓国人は全般にそうしたきつい労働を忌避しがちですが、そこにベトナム人、スリランカ人、インドネシア人からロシア人までやってきて仕事をしています。

そうやって外国人がたくさん入ってきた村ではどういうことが起きるか。とくに、農家に嫁いできた女性たちが、いろいろ意識の差、あるいは、フィリピンの人ですと宗教的な問題もありますし、言語の問題だけではなく学歴の差もあります。むしろ、ベトナムから来た女性は学力が高いため、夫との間に対話が成り立ちません。年齢差もあります。子どもが生まれると、子どもは母親の言語を知らないですから、おばあさんと一緒になります。そうすると女性は、おばあさんに子どもを預けて、村から逃げ出そうとする、男性はそれを監視しようとする立場にもなります。

子どもの勉学を母親が見ることができないから、学力の差ができてきます。そうでなくても、韓国社会は学力の問題で、みんな、教育のために地方の村でも、韓国人の両親は子供たちを農村部の学校ではなく町の学校に送ろうとします。そうすると、地元の農村の学校は、フィリピンとベトナムの子どもたちばかりになっていくわけです。そして、母親とうまくいかずに、教育が不十分なまま大人になっていくため、いろいろな問題が今、社会問題になりつつあります。それ以外にも付随してさまざまな問題が起きています。

こういうことは、もう韓国全国で起きていることですが、日本でも他人事ではありません。日本はもう少し慎重に、しかし、外国人を受け入れようとしています。外国人を労働力として受け入れるだけでなく、新しい社会をどのように描くかというような大きな問題を、隣の韓国に、ちょっと学生たちを連れて研修旅行に行くだけで、もう目の当たりに見ることができるわけです。

中国でも同じような問題がたくさんあります。中国の場合は、また別の問題で、規制も厳しいところがありますが、日本から帰った研究者あるいは教授たち、学生もいて、交流も深めることができます。そういった現代的な課題を共有する教育・研究プロジェクトという形態も、ぜひ南山大学でもお考えになったらいかがでしょうか。私はそれを提案したいと思います。

そして、交流のパートナーとなってくれる人たちは、日本で研究して帰った人たちがいくらでもいます。そうした交流もぜひ、南山大学における人類学の教育・研究の発展の核に据えたなら、広く学生たちの関心に応えられるのではないかと思います。そういうことを申し上げたいと思って、参りました。以上です。